

自己効力感をめぐる謎／男女別分析／ 文系・理系はどう決まるか？

—— コンピテンシー自己評価アンケート分析（SSHⅡ期）Vol.2 ——

山 村 和 世ⁱ
禰 覇 陽 子ⁱⁱ

〈キーワード〉 自己効力感 ジェンダー変数 文系・理系の進路選択 中高大連携の重要性

1. 本稿の目的

研究課題として、「多様な他者との対話性を備えた科学技術系人材を育成するための、中高大を貫く教育課程の開発」というテーマを掲げる、中央大学附属中学校・高等学校（以下、「本校」と呼称する）のSSH事業には、1）「教養総合」の拡充——教養総合の開発と推進、2）「理科×英語」の教科協働の推進——PIE for Scienceの開発と推進、3）学習支援に繋がる評価方法の深化——コンピテンシー・ベースの観点別評価体制の開発と推進、の3つの柱（＝研究開発課題）がある。

本稿の目的は、3つの柱のうち3番目の観点から、質的・量的データの分析にもとづいて、本校の教育活動に有効な省察（リフレクション）をもたらすことにある。下記図表のとおり、7カテゴリー14項目のコンピテンシーを選定したChufu-compassデータは、この目的にとっての根幹に位置するものであり、重要なデータを経年的に蓄積しつつある。以下では、本校のSSH事業Ⅱ期目（5年間）の2年目にあたる2024年度のデータを中心に、そのほかのアンケート調査結果も加えて、いくつかの有益な知見を提出することをめざす。

7つのカテゴリー	14のコンピテンシー項目	
I 学習する力	知識獲得(101)	情報収集(102)
II 考える力	課題発見(201)	論理的思考(202)
III 新しいことに挑む力	探究する意欲(301)	推論する力(302)
IV やり遂げる力	目標設定(401)	計画管理(402)
V(1) 理解する力	傾聴力(501)	内容理解(502)
V(2) 伝える力	記述力(503)	説明力(504)
VI 協力する力	共創力(601)	行動力(602)

※得られた回答は、レベル1～4の4段階にカテゴライズ（Lv.1:問題行動、Lv.2:指示待ち行動、Lv.3:自主的行動、Lv.4:自律的行動）

「コンピテンシー自己評価アンケート分析（SSHⅡ期）」の第二弾（Vol.2）である本稿の分析作業（以下、**2024年度分析**と呼称する）は、大まかに**3つの方針**を具体的に設定している。その概略について、つづいて述べる。

1－1．作業方針1：自己効力感をめぐる〈謎〉の解明

Chufu-compass における 14 項目のコンピテンシーには、各アンケート項目に対する選択肢として、4 段階のレベル（Lv.1～4）設定が施されており、講座別、学年別、学校別の回答傾向の特徴が析出できるものとなっている。

分析にあたっては、「**自己効力感 self-efficacy**」というコンセプトがとくに重要となる。生徒のアンケート回答のうち、「問題行動（Lv.1）」と「指示待ち行動（Lv.2）」を合わせて「**自己効力感・低**」、「自主的行動（Lv.3）」「自律的行動（Lv.4）」を合わせて「**自己効力感・高**」とカテゴライズすることで、Chufu-compass データはこれまでに、次のような重要な知見をもたらすに至っている（山村・禰覇 2024）。

- （1）本校生徒のおおまかな傾向性として「**自己効力感の低さ**」がある。しかし、高校生活を通じての変容もうかがわれ、自己効力感は改善していく。
- （2）自己効力感の高・低をめぐって、〈高入生一内進生格差〉という問題がある。しかし〈高入生一内進生格差〉も、高校3年間を通じて縮小していく。
- （3）生徒は、学業成績とは別の評価軸も用いて、自己の能力（コンピテンシー）について認識している。しかも、学業成績とはかかわりなく、自己効力感は伸びていく。

これらの知見は、Chufu-compass データによる経年的な観測がなければ判明しなかったことであって、7 年にもおよぶ経年データの蓄積は、そのこと自体、画期的な意義をもっている。われわれはこれらの知見によって、現場の教育活動を、別の角度から眺めるためのフィードバックを得られるだろう。さらには、カリキュラムの硬直的部分に見直しを進めていくための、ピースミールな改善につなげることも期待される。

ただし、Chufu-compass データから得られたこのインパクトのある知見は、後述するとおり、**新たにいくつかの〈謎〉を生むもの**でもあった。2024 年度分析の第一の作業目的は、追加データと併せて、その謎の一端を解明することにある。

1－2．作業方針2：男女のジェンダー変数に着目する

2024 年度分析の第二の目的は、男女のジェンダー変数を考慮したデータの整理をおこなうことである。ここでは、その必要性が浮上することとなった契機について述べておく。

2023 年度の Chufu-compass 分析から、われわれは、下記の図表のような結果を得た（「推論する力（302）」）。このクロス集計表からは、すでに言及した〈高入生―内進生格差〉が確認できるのだが、それ以外にも、高入生のなかでも、高入（推薦組）と高入（一般組）の入学形態別で、自己効力感に相違があることが読みとれる。

推論する力（302）

2023 年度高1生	自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		全体	
入学形態	人数	%	人数	%	人数	%
高入(推薦)	68	64.2%	38	35.8%	106	100%
高入(一般)	70	56.9%	53	43.1%	123	100%
内部進学	126	72.8%	47	27.2%	173	100%
全体	264	65.7%	138	34.3%	402	100%

さて、このデータは、どのように解釈できるだろうか。一見すると、「入学形態」変数に何らかの意味があるように解釈したくなるのであるが、ここで注意すべきことは、「推薦組は女子が多く、一般組は男子が多い」という傾向である。すなわち、ここには男女のジェンダー変数が関与していることが推測されるのである。

男女差に注目した分析を求める声は、本校教員のなかからも上がっている。日々の実践のなかで、教員は、男女のジェンダー差に起因するであろう、さまざまな現象を肌で感じている。次の引用は、Chufu-compass データの分析結果を教員間で共有した際に、同時に実施された教員アンケートからの言葉である。

今回のアンケート対象となった高校1年生のうち、内進生（中学 11 期生）の中学時の成績上位者はほとんどが女子であり、また、現中学1年生（中学 14 期生）においても同様の状態である。もちろん全員ではないが、中学においては女子の方が物事に対してしっかりと取り組み、着実に消化していくことに長けている。また、生徒会活動やスピーチコンテストなど、自ら立候補しアウトプットするような活動において、中学では女子の活躍が目立つ。これらの点から、アンケートにおける「男女差」を知りたい。

（2023 年 12 月 3 日実施の教員アンケート）

たしかに振り返ってみると、Chufu-compass データ分析では、これまで男女のジェンダー変数を考慮した分析が手薄であったと考えられる。このことから 2024 年度分析では、自己効力感をめぐるデータを、ジェンダー変数を付加して再検討し、そこから得られる知見を整理していきたい。

1－3. 作業方針3：文系・理系はどう決まるか？——科学技術系人材の育成

本校 SSH 事業は「多様な他者との対話性を備えた科学技術系人材を育成するための、中高大を貫く教育課程の開発」を目的としている。2024 年度分析では、とくに「科学技術系人材」の育成というテーマにフォーカスして、Chufu-compass データ分析を基軸としつつも、それにとどまることなく、分析の多角化も推し進めたいと考える。

この目的のもと、2024 年度は、高校3年生を対象として進路決定時期である10月下旬に、「文理選択はどのように？」と題する、新たなアンケートを実施した。具体的には、**文系・理系の進路決定要因を、1) 授業・成績からの影響、2) 大学での学問・キャリアの影響、3) 周囲からの影響、の3つの領域**に区分して、高3生徒の回答を求めた。加えて、それぞれの生徒がいつ進路を見定めたかという「**進路決定時期**」についても調査した。

この調査方針の背景についても説明しておく。Chufu-compass データ分析からは、生徒の自己効力感がどのタイミングで、どのように変容していくのか、そしてそれが本校のカリキュラムとどのように関連しているか、などを検討することができる。しかし他方で、とりわけ「科学技術系人材」の育成という観点に照準した場合、本校のカリキュラムが、理系進学者にとって（／理系を選ばない生徒）にとって、どのような意味をもつものであるかは、Chufu-compass のデータのみから考察するには限界も生じていた。

「**文理選択はどのように？**」アンケートは、この欠落を埋めるために実施されたものである。科学技術系人材の育成という観点から、生徒の自己効力感を涵養するカリキュラムについて考えるには、中高生がいつ理系／非理系を選択するのか、その選択に影響を与える要因は何か、などをふまえたうえで議論を進めていくことが肝要である。これらの検討を進めていくことが、2024 年度分析の第三の目的である。

1－4. 本稿の作業方針

以上より、本稿の作業方針は次のようにまとめられる。

- (1) 本校生徒の自己効力感をめぐる謎について、その一端を解明する。
- (2) Chufu-compass データを男女のジェンダー変数にもとづいて解析する。
- (3) 「文理選択はどのように？」アンケートから、生徒の進路選択行動を解明する。

第2章以下では、この作業方針(1)から(3)の順序で分析を進めていく。なお、(1)～(3)の作業は、それぞれ個別に独立したものであるが、三つの知見を総合することで、はじめて浮かび上がる知見も期待される。そうした総合的知見については、結論部となる第5章で論じる。

2. 自己効力感をめぐる〈謎〉

2-1. 3つの〈謎〉

日々の教育活動のリフレクションにおいて、データは道標の役割をはたす。しかし、リフレクションは探索的なプロセスであるから、そこからはまた新たな〈謎〉が生み出される。自己効力感をめぐっては、これまで〈高入生—内進生格差〉の現実があぶり出されているが、そこから派生して、2024年度分析の時点では、以下の〈謎1〉～〈謎3〉が浮上している。

2-1-1. 〈謎1〉

〈謎1〉は、次のようなものである。

〈謎1〉：〈高入生—内進生格差〉が生まれ、附属中学から進学する内進生の自己効力感が（高入生よりも）低いのはなぜなのだろうか？

附属中学から進学した「内進生」は、高校受験で入学してきた「高入生」に比べて、知識を獲得する意欲が乏しく、推論する力に自信がなく、目標を設定することにも、スケジュール管理にも苦手意識を持ち、自分の意思・判断によって責任をもって行動するにいたっていない傾向がある——。しかし、それはいったいなぜなのだろうか。

いくつかの仮説を考えてみよう。もしかしたら、**中学受験を経てきた内進生は、（塾などでの）準拠集団の学力レベルの高さゆえに自己効力感が低いのかも**かもしれない。逆に**高入生は、公立学校で学力上位層であったために自己効力感が高いのかも**かもしれない。あるいは、**内進生への日頃の教員のコミュニケーションのあり方が、生徒の自己効力感を押し下げる方向に影響を及ぼしているのかも**かもしれない（たとえば、「高校では勉強が大変だぞ！」「高入生は受験勉強して入学してくるんだぞ！」といった声がけ）。いずれにしても、これらは本校の教育的コミュニケーションのあり方を見定めるうえで重要な〈謎〉であろう。

2-1-2. 〈謎2〉

同様の重要性をもつ〈謎〉として、次の〈謎2〉がある。

〈謎2〉：〈高入生—内進生格差〉は高3時点で解消されていく。であるとすれば、〈高入生—内進生格差〉は、解決されるべき問題と見なされるべきだろうか？ それとも、解消されるのだから、問題視される必要はないと考えるべきだろうか？

〈謎2〉に関しては、じつはこのデータに基づいて、**仮説的な介入**がすでに試みられてい

ることが重要である。そもそも本校の Chufu-compass データ分析は、「経年比較データ等を通じて、生徒の能動的活動を促進するための課題抽出、カリキュラム改善へとつなげる」という実践へのフィードバックを一つの目的としている。「内進生の自己効力感が低い」というデータ結果については、これを問題視する観点から、**2021 年度入学生から「教養総合基礎（中3）」・「教養総合Ⅰ（高1）」が設定されるカリキュラム改革**が実行された。この両科目は、「**失敗からの再挑戦**」をコンセプトとしており、失敗を怖れない自己効力感の涵養をめざすものだったのである。

ただし、この「仮説的な介入」の一方で、〈謎2〉は解消されないままに残っている。根本的には、そもそも「自己効力感の低さ」をどう考えるかという問題が横たわっている。「自己効力感の低さ」とは、裏を返せば生徒の「知的謙虚さをあらわす美德」とも解釈できるし、逆に「自己効力感の高さ」についても、これも裏を返せば、「自信過剰 over-confidence」と受け取ることもできる。国際的な科学リテラシーを論ずる場でも、後者の「自信過剰」が問題視されることはしばしばであり、したがって「自己効力感」というコンセプトをめぐる評価には、取りあつかいが微妙なところがある。

加えて、かりに〈高入生―内進生格差〉が問題であったとしても、これは結局、高校3年生になれば、自己効力感が高まる方向で解消されていくことも分かっている。そうであれば、これらはそもそも問題視すべき課題ではないのかもしれない。「教養総合基礎（中3）」・「教養総合Ⅰ（高1）」のカリキュラム改訂も、あくまで仮説的な働きかけにとどまるものであり、〈謎2〉をめぐっては、カリキュラム改訂の長期的な効果測定とともに、慎重な検討が必要となっている。

2-1-3. 〈謎3〉

最後に、〈謎3〉は、次のようなものである（山村・禰覇 2024：31）。

〈謎3〉：そもそも本校生徒は、なぜ自己効力感が低いのだろうか？ 高1時点の高入生に限定しても、本校生徒の自己効力感は低い。しかも、入試難易度や、同一大学の附属校といった点できわめて共通性の高い中大杉並高校と比較しても、自己効力感
は低いのである。

この〈謎〉についても、いくつかの仮説を考えてみよう。本校（中央大学附属中学校・高等学校）と中大杉並高校には、1）併設中学の有無、2）校風における自由度、の2点で大きな違いがある。このうち2）に着目すると、本校は「校則がきわめて自由で、服装や髪型などにも制約がなく、制服もない」という点が特筆されるだろう。

もしかすると、本校の生徒は、ルールがないなかで自律的な行動を求められ、しかも「正解」が示されず、それゆえに漠然とした不安を抱えているのかもしれない。あるいは、明文化されたルールがないゆえに、教員が設定する恣意的なルールに振り回されて(たとえば、「ハロウィンでも授業を受ける際の礼儀は守りなさい!」といった声がけ)、ダブルバインド(二律背反)的な心理的混乱状態にあるのかもしれない(重ねて言えば、これは仮説にすぎない)。

これらとはまったく別に、次のようなことも考えられる。本校を志望する生徒は、中学時代以前から学校文化に順応できない反学校的性向を特徴としており、それゆえに自由を強く求めて本校を選ぶ一方、中大杉並高校では、向学校的性向をもった、学校文化に順応した優等生気質の生徒が志望するケースが多く、そうした〈向学校的ー反学校的〉な差異が自己効力感の差異となって表出されるのかもしれない。

2-2. 〈謎1〉を解明する

〈謎1〉～〈謎3〉は、このように、いずれも謎めいた内容となっている。しかし本稿において、この3つの〈謎〉のすべてを、いちどに解決することは難しい。そこで2024年度分析では、〈高入生ー内進生格差〉問題において、もっとも根幹に位置する問い、すなわち「〈謎1〉：内進生の自己効力感の低さがなぜ生じるのか」について照準し、新たなデータセットも追加しつつ、〈謎〉の一端を解明することをめざす。

解かれるべき問題を定式化しておこう。前述のとおり、〈謎1〉をめぐるのは、三つの仮説的な説明図式がある。

仮説1：中学受験を経てきた内進生は、準拠集団の学力レベルの高さゆえに自己効力感が低い。

仮説2：高入生は、公立学校で学力上位層であったために自己効力感が高い。

仮説3：内進生への日頃の教員のコミュニケーションのあり方が、生徒の自己効力感を押し下げる方向に影響を及ぼしている。

ここで「仮説1」と「仮説3」は、たがいに相反する内容を含んでいることに注目しておきたい。なぜなら、「仮説1」は、中学受験の(小学生時代の)経験が、自己効力感の低さに影響しているとするのに対して、「仮説3」は、中学校における教育経験が、自己効力感の低さに影響するとの説明図式となっているからである。

つまり、「仮説1」と「仮説3」は両立しない。では、どちらが正しいのだろうか。

2-3.〈謎1〉を解明する手段——ジュニア版 Chufu-compass の開発

内進生の自己効力感が低いのは、小学生時代の経験によるのか、中学生時代の経験によるのか——。この問題を解明するため、2024年度分析では、**中学生向けに「ジュニア版 Chufu-compass」を開発**した¹。中1～中3の各学年における、自己効力感の傾向をくわしく調べれば、上記の問題が明らかになるのではないかと考えられたからである。

データ結果を紹介する前に、復習の意味もかねて、Chufu-compass データの取得・分析プロセスについて確認しておく。Chufu-compass アンケートでは、生徒は、14項目のコンピテンシーごとに設定された次のような各質問文について、①～④の回答番号で回答することになっている。

101【知識獲得】

- ①特定の分野においてさえ、自分の知識は不十分だと思う
- ②特定の分野においては十分な知識をもっていると思う
- ③色々な分野の知識をもっており、新たなものも習得しようと努めている
- ④幅広い分野で知識を習得しており、それらを深めようと努力している

401【課題発見】

- ①何も足りないものはないと感じている
- ②与えられた課題は正しく理解できているつもりである
- ③与えられた課題だけでなく、新たな問題点を見つけようとしている
- ④与えられた課題だけでなく、自ら新しい課題を設定することができている

ここで、回答番号①は「レベル1 (Lv.1) = 問題行動」、②は「レベル2 (Lv.2) = 指示待ち行動」、③は「レベル3 (Lv.3) = 自主的行動」、④は「レベル4 (Lv.4) = 自律的行動」と評価的にカテゴライズされている。そのうえで実際の分析にあたっては、「問題行動 (Lv.1)」と「指示待ち行動 (Lv.2)」を合わせて「**自己効力感・低**」、「自主的行動 (Lv.3)」「自律的行動 (Lv.4)」を合わせて「**自己効力感・高**」と、さらなるカテゴライズが施されることについては、すでに述べたとおりである。

右ページに、Chufu-compass のコンピテンシー項目の一覧表を掲載しておく。

¹ ジュニア版 Chufu-compass は、高校生向け Chufu-compass アンケートと同様に、2024年5月（1学期中間テスト前のタイミング）に、中学1年～3年の全生徒に向けて実施された。なお、このコンピテンシー調査では、質問文の性質を考慮した結果、高校生向けのものよりも調査項目数が3つ減らされて、全11項目となっている。削減された項目は、「情報収集（102）」、「論理的思考（202）」、「記述力（503）」である。

カテゴリー	キーワード	行動特徴	レベル1 問題行動 回答番号①	レベル2 指示待ち行動 回答番号②	レベル3 自主的行動 回答番号③	レベル4 自律的行動 回答番号④
I	学習する力 【知識獲得力】	読み書きによって基礎学力を身につける。また、観ること、聴くこと、感じることによって、広く教養を身につける	基礎学力が何を意味するのか分からない	基礎学力が何なのかを理解できている	基礎学力がある程度は身についているが、一部に不安がある	基礎学力が身についているが、複数の知識に関連づけることはできない
I-01 知識獲得	学習	特定の分野だけでなく、幅広い分野で知識を深く習得することを継続する	①特定の分野においてさえ、自分の知識は不十分だと思う	②特定の分野においては十分な知識をもっていると思う	③色々な分野の知識をもっており、新たなものも習得しようとしている	④幅広い分野で知識を習得しており、それらを深めようと努力している
I-02 情報収集	情報収集	必要な情報を手に入れ、くわしく調べた上で取捨選択し自分のものとする	①何が必要な情報なのかさえわからないことがよくある	②何が必要な情報なのかは、何となくわかっていっているつもりである	③情報の必要性に気づき、それを集めることができる	④情報を入手し、くわしく調べた上で取捨選択し、自分のものにしてしている
II	考える力 【問題解決力】	幅広い視野で問題をとらえる。また、習得した知識・知恵・技術を活用し、解決に向けて取り組む	身の周りに特に問題はないと感じている	与えられた課題を「解く」ことならばできる。	問題の所在がわかり、それに対する解決策を探ろうとしている	問題の所在を把握し、それに対する解決策を立てられる
II-01 課題発見	課題発見	今の自分や周囲の状況に足りないものを把握し、取り組むべき課題を見つける	①何も足りないものはないと感じている	②与えられた課題は正しく理解できているつもりである	③与えられた課題だけでなく、新たな問題点を見つけようとしている	④与えられた課題だけでなく、自ら新しい課題を設定しようとしている
II-02 論理的思考	論理的思考	対象の本質を図式化して整理し、筋道立てて自分の意見や作業手順を組み上げることができる	①何が論理的なのかがよくわからない	②単純な項目ならば、記号と矢印などを使って筋道立ててまとめることができる	③複数の項目を記号と矢印などを使って筋道立ててまとめることができる	④ほとんどの場合に記号と矢印などを使って図式化・構造化することができる
III	新しいことに 挑む力 【創造力】	自身を知り、受け容れ、自尊心を育む。また、自身の力を信じて切磋琢磨し、人間性を高める	自己肯定感を持てず、努力する意味を見出せない	現在の自分を受け容れ、自尊心を育もうとしている	自分の力を信じて、切磋琢磨しようとしている	自分の力を信じて、切磋琢磨しようとする継続的に努力している
III-01 探究する意欲	探究する意欲	旺盛な知的好奇心をもち、未知の知識を取り入れようとする	①新たな知見を得ようという姿勢など持っていない	②自分の興味のある分野については、知見を広げようとしている	③自分の興味のある分野以外でも、知見を広げようとしている	④自分の興味のある分野以外でも、継続的に知見を広げようとしている
III-02 推論する力	推論する力	できごとの要因や規則性をおしはかり、仮説の確からしさを高めるが問題解決に向かう	①できごとの背後にある要因や規則性を見つけ出そうとしたことなどない	②できごとの背後にある要因や規則性を見つけ出そうとしたことがある	③できごとの要因や規則性をおしはかり、仮説の確からしさを高める努力をしたことがある	④できごとの要因や規則性をおしはかり、仮説の確からしさを高める努力を継続的にしている
IV	やり遂げる力 【自己実現力】	目標を高く定め、計画的に行動する。また、達成に向けて諦めずに粘り強く努力する	目標を見つげようとせず、与えられた目標を達成しようと思わない	目標があるとそれを達成したいと思い努力する	自ら目標を定め、その実現のために道筋を考え、達成に向けて諦めずに努力することができる	自ら高い目標を定め、その実現のために道筋を考え、達成に向けて諦めずに努力することができる
IV-01 目標設定	目標設定	自らを高めるための適切な目標を設定する	①そもそも目標を設定することができていないと思う	②目標を設定することはできていると思う	③適切な目標を設定することができていると思う	④適切で明確な目標を設定することができていると思う
IV-02 計画管理	計画管理	目標達成のために必要な日常生活の管理(時間・健康・金銭)を行う	①スケジュール管理などしたことがないし、する意味も感じていない	②スケジュール管理はできているほどと思う	③計画に基づいたスケジュール管理を行っており、定期的なチェックもできていると思う	④計画に基づいたスケジュール管理を行っており、定期的なチェックも欠かさず、その結果を実践へと反映できていると思う
V (1)	理解する力 【コミュニケーション力】 (1)	他人の意見を聞き、その意見を尊重する。また、記述された内容を正しく理解する	相手の理解し、相手に自分の意見を伝えることができない	相手の意見を一通り理解することはできる	相手の意見を一通り理解した上で、その要旨を把握することができる	相手の意見を一通り理解した上で、その要旨をまとめることができる
01 傾聴力	傾聴力	他人の意見を聞き、正しく理解し、尊重する	①他人の意見を聞くとうとせず、自分の意見にこだわってしまうことがよくある	②相手の意見に耳を傾けようとはしている	③相手の意見を一通り理解し、その要旨を把握することができる	④相手の意見を一通り理解し、その要旨を手短かにまとめることができる
02 内容理解	内容理解	記述された内容を正しく理解する	①記述された内容が理解できなくてもあまり気にしない	②記述された内容を理解しようとはしている	③記述された内容を理解し、その要旨を把握することができる	④記述された内容を理解し、その要旨を手短かにまとめることができる
V (2)	伝える力 【コミュニケーション力】 (2)	他人が理解できるよう正確に記述する。また、適切な手順・手段を用いてわかりやすく・効果的に自分の意見を伝える	相手の理解し、相手に自分の意見を伝えることができない	相手の意見を一通り理解し、相手に自分の意見を伝えることができる	相手の意見を一通り理解した上で、自分の意見の伝え方に工夫を加えることができる	相手が納得するような意見の伝え方をすることができる
01 記述力	記述力	正しい文章で他人が理解できるように記述する	①自分が書いた文章に誤りがある場合がよくある	②自分なりに意味の通った文章を書くことができる	③正しい文をつないで、他人が一通り理解できるように書くことができる	④正しい文をつなぐばかりでなく、他人の理解をうながすよう工夫して書くことができる
02 説明力	説明力	適切な手順・手段を用いてわかりやすく説明したうえで、自分の意見を効果的に伝える	①相手にわかりやすく説明することができていないと思うことがよくある	②相手にわかりやすく説明しようとしていると思う	③相手にわかりやすい説明がある程度できていると思う	④相手にわかりやすい説明をほぼつねにできていると思う
VI	協力する力 【組織的行動能力】	お互いの存在を認め合い、信頼関係を築く。また、倫理観をもって、集団の一員としての責任を果たし、協調して物事をやり遂げる	チームで作業ができるが、自己中心的な行動をとる	指示されると作業できるが、目標を達成するために自ら動くことはしない	チームでの作業、行動において共通の目標を理解している	チームでの作業、行動において共通の目標を理解し、達成するために当事者意識をもって行動している
VI-01 共創力	共創力	共通の目標を達成するためにお互いの考えを尊重し、信頼関係を築くような行動をとる	①そもそもチームで作業することが苦手だ	②チームで作業はできるが、自ら動くことはしない	③チームでの作業において、チームとしての共通の目標を理解しようとしている	④チームでの作業において、チームとしての共通の目標を理解し、それを達成するために当事者意識をもって行動している
VI-02 行動力	行動力	先に立って実践する。先に立って模範を示し、他を誘導する	①そもそも自分には行動力がないと思う	②行動はしているが、他者に従って、あるいは真似をしていることが多いと思う	③自分の意志・判断で行動していると思う	④自分の意志・判断で責任をもって行動していると思う

2－4. ジュニア版 Chufu-compass の結果

それでは、ジュニア版 Chufu-compass の全体的な傾向はどのようなものだったか。（前節で質問文を掲げておいた）「知識獲得（101）」・「課題発見（401）」の2つのコンピテンシーについて確認したところ、学年別の結果は、次のようなものとなった。

知識獲得（101）

101 知識獲得	自己効力感・低 (Lv.1 + Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3 + Lv.4)		全体	
学年	人数	%	人数	%	人数	%
中1	119	69.2%	53	30.8%	172	100.0%
中2	148	85.1%	26	14.9%	174	100.0%
中3	133	77.3%	39	22.7%	172	100.0%
全体	400	77.2%	118	22.8%	518	100.0%

目標設定（401）

401 目標設定	自己効力感・低 (Lv.1 + Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3 + Lv.4)		全体	
学年	人数	%	人数	%	人数	%
中1	92	53.5%	80	46.5%	172	100.0%
中2	119	68.4%	55	31.6%	174	100.0%
中3	115	66.9%	57	33.1%	172	100.0%
全体	326	62.9%	192	37.1%	518	100.0%

このクロス集計表から意味ある解釈を導くためには、少しばかりの工夫が必要であるので、最小限の説明を加えておく²。限定されたデータから、生徒の具体的な成長のイメージを得るために、本稿では、次の仮説的前提を導入している。それは、「中1生の意見傾向は、中2になれば現中2生の意見傾向と同様のものとなり、また中3生になれば現中3生と同様のものとなる」という、さしあたっての仮定である。つまり、中1、中2、中3の各データについては、入学年度ごとに相違する固有の特質を有するものとは見ない。

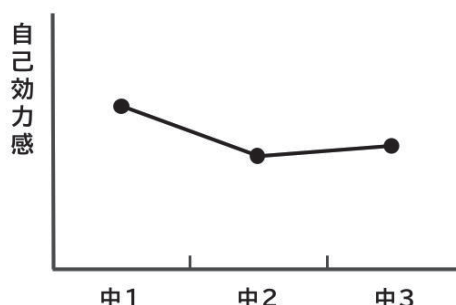
この方法論的仮定のもとで、「知識獲得（101）」・「課題発見（401）」で見られる傾向を解釈するならば、次のような知見が得られるだろう。

² 方法論についての詳細は、山村・禰覇（2024）の5－2節「方法論的前提——データ解釈の自由度を上げる」を参照してほしい。また本稿ではこれ以降、基本的にはこの方法論的前提を、高校生の2024年度 Chufu-compass データについても適用する。

結果１：そもそも、内進生は入学時から自己効力感が高いとは言えない。

結果２：中学生の自己効力感は、中１（の初めての定期テスト前）でもっとも高く、中２で下落し、低位のまま中３まで安定する傾向をたどる。

なお、この「知識獲得(101)」・「課題発見(401)」の傾向は、ほかのすべてのコンピテンシー項目でも共通していることが確認された。すなわち、内進生の自己効力感は、右のイメージ図のような変容傾向をもっている。この結果は、次節で説明するとおり、自己効力感をめぐる〈謎〉を、一定レベルで解明するのに役立つ。



2－5. 〈高入生－内進生格差〉再考——ジュニア版 Chufu-compass の分析

われわれは2－2節において、〈高入生－内進生格差〉の説明図式として、3つの仮説を取り上げた。このうち「仮説1」は、「中学受験の（小学生時代の）経験が、自己効力感の低さに影響している」とする説明図式であり、「仮説3」は、「中学校における経験が、自己効力感の低さに影響する」という説明図式にもとづくものであった。

前節における「結果1：そもそも、内進生は入学時から自己効力感が高いとは言えない」は、このうち、「仮説3」の確からしさを棄却し、「仮説1」の確からしさを支持する結果となっている。この結果が有するインパクトは非常に大きい。

ここで、2023年12月に実施された教員アンケートを話題に差し挟んでおこう。「高入生と比べて内進生の自己効力感が低い」という〈高入生－内進生格差〉のデータが明らかになった時点で、本校教員のなかでは、それが自分たちの教育的コミットメントのあり方に帰責されるのではないか、という懸念が生じていた。アンケート回答から引用する。

中学の教育プログラムに何か問題があって自己効力感が低いのだとしたら、改善に向けた新たな取り組みを進める必要があると思います。

自戒もこめてですが、「ダメだダメだ」モードの指導をしてしまっているな、と思います。「このままだと高校で留年するぞ」「大学に行けないぞ」といった発話を少なくし、できること・できていることをきちんと評価する発話をしていく必要があると思います。

（2023年12月3日実施の教員アンケート）

これらはすべて Chufu-compass の結果に対する、真摯なりフレクシオンである。しかしながら、ジュニア版 Chufu-compass のデータ結果からは、**これらの真摯なりフレクシオンは、必ずしも妥当な解釈であるわけではない**、ということが判断できる。内進生の自己効力感は入学時点から低く、したがってそれは教員の働きかけや中学の教育プログラムが主因であるとは考えにくいのだ³。

むしろ妥当性があるのは、「中学受験の（小学生時代の）経験が、自己効力感の低さに影響している」という「仮説1」である。

考えられる要因について、仮説を述べよう。もしかすると、**彼らの自己効力感が低いのは、中学受験で高いレベルの学力競争にさらされた経験からかもしれない**。あるいは、**大学附属校という、大学受験が免除された学校に入学できたことで生まれる、ある種の「安心感」や「ゆるみ」が原因かもしれない**（もちろん、大学附属校だからといって、質量ともに負荷のある勉強から解放されるわけではないが、主観的には、そのような安心感が抱かれたいと言い切れない）。もしくは、**激烈な中学受験をつうじての親子関係のあり方などが、何らかの影響を及ぼしているのかもしれない**。これらはすべて推測でしかないが、いずれにしても、中学入学時点ですでに、本校内進生の自己効力感が高くはないのである。

もちろん、本校教員のコミュニケーションのあり方の影響が小さいと見積もられるからといって、そのことは、やるべきことはなにもない、反省すべきことはなにもない、という結論を導くわけではない。ふたたび、教員アンケートを引用しよう。

自信がもてる機会が不足しているのか、自ら考えることが苦手なのか、具体的な手立ては思い浮かびませんが、中学生なので教員の働きかけは必要だと思います。

（2023 年 12 月 3 日実施の教員アンケート）

前述のとおり、「自己効力感が高い／低い」という問題は、これをどう評価するかという微妙な問題を含んでいるため、あつかいが難しい。とはいえ、内進生の自己効力感が低い、という現実は一層厳然として存在している。「仮説3」の確からしさが棄却されることで、〈謎1〉の一端は解明されたものの、この問題への働きかけについては、この知見をふまえるかたちで、今後も慎重に検討していくことが必要となるだろう。

³ 前頁の「イメージ図」を見ると分かるように、正確には、中学のあいだでのわずかな低減傾向はある。これは仮説であるが、「中1の5月段階の自己効力感が、中2で低下する」のは、定期テストなどで中学校での学業レベルの相対的位置が判明することによって、何らかの自己修正が働くからかもしれない。

3. 男女のジェンダー変数はどう影響するか？

3-0. 男女別分析の作業手順

第3章では、2024年度分析の「作業方針（2）」の男女別分析について進めていく⁴。

本節の作業手順について述べよう。まず、データ整理の基礎作業として、2024年度に取得した Chufu-compass データ（2024年5月実施）に関して、すべての学年ごとに、男女のジェンダー変数を独立変数とするクロス集計表を作成した。

つづく3-1節では、これに基づき、高校生向け Chufu-compass データ結果を概観し、分析していく。さらに今年度はジュニア版 Chufu-compass データも取得しているため、3-2節では、中学生（内進生）の男女別傾向についても検討する。そのうえで3-3節では**中高6年間を通じての、男女別のコンピテンシーの変容**を明らかにする。

3-1. ジェンダー変数による分析：高校編

3-1-1. 男女差の大きいコンピテンシー項目（高校）

まずは全体の結果を概観するところから始めよう。

本節では、高1～高3のそれぞれで、男女ごとに、もっともポイント差が開いたコンピテンシー項目（パーセンテージで5ポイント差以上の開きがあるものに限定）についてピックアップし、その結果を紹介していく。

高1で、もっとも男女差が見られたのは、「**知識獲得（101）**」のコンピテンシー項目であった。「知識獲得（101）」で自己効力感が高いのは男子であり、女子と比べて10ポイント近くの差が開いている。

101 知識獲得		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高1	男子	110	66.7%	55	33.3%	165	100.0%
	女子	157	76.2%	49	23.8%	206	100.0%
合計		267	72.0%	104	28.0%	371	100.0%

一方、高1で女子の自己効力感が高く、かつ男女差がもっとも大きかったコンピテンシー項目は、「**共創力（601）**」であった。下記のとおり、8ポイントの差が開いている。

⁴ なお、ジェンダー変数を加えた調査にあたっては、ジェンダー・アイデンティティの多様性にたいする配慮が必要であることは言うまでもない。Chufu-compass アンケートでは、性別の回答項目は設けられておらず、学籍データ上の性別区分を照合し、後からデータに情報が追加されている。また、ここでの分析から導かれた解釈が、ジェンダーバイアスをいわずに強化・増幅するようなことがないよう、一定の留意も必要だろう。

601 共創力		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高 1	男子	66	40.0%	99	60.0%	165	100.0%
	女子	66	32.0%	140	68.0%	206	100.0%
合計		132	35.6%	239	64.4%	371	100.0%

高2で、もっとも男女差が見られたのは「説明力 (504)」のコンピテンシー項目である。こちらは17ポイントの大差で、男子の自己効力感が高い。次いで、男女差が見られたのは「情報収集 (402)」で、こちらは女子の自己効力感が約9ポイント高くなっている。

504 説明力		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高 2	男子	105	55.3%	85	44.7%	190	100.0%
	女子	141	72.3%	54	27.7%	195	100.0%
合計		246	63.9%	139	36.1%	385	100.0%

402 計画管理		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高 2	男子	151	79.5%	39	20.5%	190	100.0%
	女子	138	70.8%	57	29.2%	195	100.0%
合計		289	75.1%	96	24.9%	385	100.0%

高3で、もっとも男女差が見られたのは「推論する力 (302)」のコンピテンシー項目であり、12ポイントの大差で男子の自己効力感が高くなっている。なお、女子が男子を5ポイント以上、上回ったコンピテンシー項目は、高3では存在しない。

302 推論する力		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高 3	男子	78	47.6%	86	52.4%	164	100.0%
	女子	109	59.6%	74	40.4%	183	100.0%
合計		187	53.9%	160	46.1%	347	100.0%

3-1-2.「学年×全コンピテンシー項目」の概観（高校）

次に、学年ごとのジェンダー差を全体的に把握するために、「学年×全コンピテンシー項目」について確認しておこう。コンピテンシー項目を一覧した下記図表において、男子の自己効力感が高いものは「青色」で着色し、女子の自己効力感が高いものは「赤色」で着色している。なお、着色は、5ポイント以上の差がついたものに限定している。

高1－高3：男子の自己効力感が高いものが「青色」、女子の高いものが「赤色」

高1

7つのカテゴリー	14のコンピテンシー項目	
I 学習する力	知識獲得(101)	情報収集(102)
II 考える力	課題発見(201)	論理的思考(202)
III 新しいことに挑む力	探究する意欲(301)	推論する力(302)
IV やり遂げる力	目標設定(401)	計画管理(402)
V(1) 理解する力	傾聴力(501)	内容理解(502)
V(2) 伝える力	記述力(503)	説明力(504)
VI 協力する力	共創力(601)	行動力(602)

高2

7つのカテゴリー	14のコンピテンシー項目	
I 学習する力	知識獲得(101)	情報収集(102)
II 考える力	課題発見(201)	論理的思考(202)
III 新しいことに挑む力	探究する意欲(301)	推論する力(302)
IV やり遂げる力	目標設定(401)	計画管理(402)
V(1) 理解する力	傾聴力(501)	内容理解(502)
V(2) 伝える力	記述力(503)	説明力(504)
VI 協力する力	共創力(601)	行動力(602)

高3

7つのカテゴリー	14のコンピテンシー項目	
I 学習する力	知識獲得(101)	情報収集(102)
II 考える力	課題発見(201)	論理的思考(202)
III 新しいことに挑む力	探究する意欲(301)	推論する力(302)
IV やり遂げる力	目標設定(401)	計画管理(402)
V(1) 理解する力	傾聴力(501)	内容理解(502)
V(2) 伝える力	記述力(503)	説明力(504)
VI 協力する力	共創力(601)	行動力(602)

3-1-3. 観察結果を変化全体のなかに位置づける（高校）

これらの結果について、さしあたり単純な事実から確認しておく。ジェンダー変数に着目した Chufu-compass データからは、次のような観察結果が得られる。

観察結果 1：自己効力感の高いコンピテンシー項目には、男女で違いがある。

観察結果 2：学年ごとに、男女差が開くコンピテンシー項目に微妙な異同がある。

観察結果 3：高校では、男子のほうが女子よりも、自己効力感が高い項目数が多い。

ただし、この観察結果(1)～(3)については、各コンピテンシー項目の自己効力感についての全体的傾向をふまえた考察が必要となるだろう。というのも、これまでの Chufu-compass データ分析からは、次のことが判明しているからである（山村・禰覇 2024：24-25）。

すなわち、本校のカリキュラムのもとで、高1から高2へと過ごすうちに、生徒の自己効力感 は明確に高まっていく。高2段階で顕著に伸びる項目も見られ、さらには高2から高3の1年間で自己効力感はいっそう明確に向上していく。高1時と比較した高3生は、ほぼすべての項目で自己効力感を向上させている。

2023年度高3生のデータから、この点を確認しておこう。次の表のうち、高1からの比較で、10ポイント以上の伸びが見られた項目は、「水色」で着色されている。高1と高3を比較すると、すべてで自己効力感が向上していることが分かる。さらに、高2からの比較で10ポイント以上の伸びが見られた項目は、「青色」で着色している。

2023年度高3生	自己効力感・低		自己効力感・高		全体	
コンピテンシー項目	人数	%	人数	%	人数	%
知識獲得(101)	228	65.1%	122	34.9%	350	100%
情報収集(102)	186	53.1%	164	46.9%	350	100%
課題発見(201)	201	57.4%	149	42.6%	350	100%
論理的思考(202)	149	42.6%	201	57.4%	350	100%
探究する意欲(301)	190	54.3%	160	45.7%	350	100%
推論する力(302)	158	45.1%	192	54.9%	350	100%
目標設定(401)	176	50.3%	174	49.7%	350	100%
計画管理(402)	234	66.9%	116	33.1%	350	100%
傾聴力(501)	99	28.3%	251	71.7%	350	100%
内容理解(502)	123	35.1%	227	64.9%	350	100%
記述力(503)	162	46.3%	188	53.7%	350	100%
説明力(504)	166	47.4%	184	52.6%	350	100%
共創力(601)	97	27.7%	253	72.3%	350	100%
行動力(602)	121	34.6%	229	65.4%	350	100%

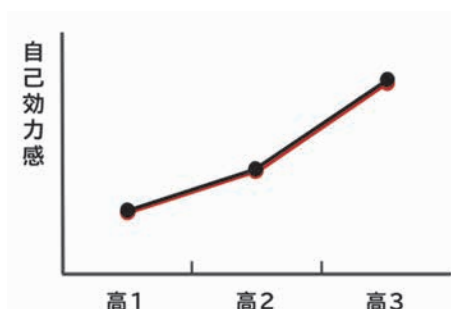
このように、本校生徒の自己効力感 は、3年間で明確に向上する。ゆえに、男女のジェンダー差についての観察結果(1)～(3)の知見も、この全体的な向上傾向のなかに位置づけていく必要がある。次節では、それを視覚的に表現することを試みよう。

3-1-4. 変容パターンを図示する（高校）

男女のジェンダー差について、本校生徒の自己効力感の3年間での伸びをふまえて、いくつかのパターンに図示すると、以下の通り、「パターン①：H」～「パターン⑥：H」のイメージ図が得られる。

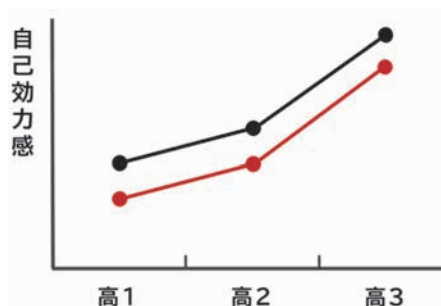
【パターン①：H】「男女の自己効力感の差がない／高校3年間で等しいスピードで自己効力感が伸びる」パターン（5ポイント以上の差がないものを「差がない」とする）。

今回の結果では、「論理的思考（202）」「内容理解（502）」「記述力（503）」「行動力（602）」が、「パターン①：H」に該当する。



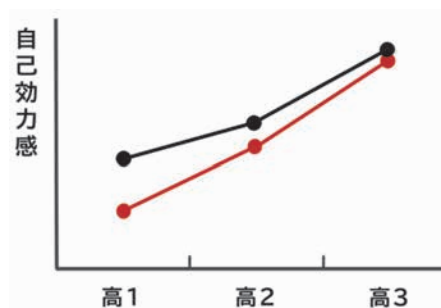
【パターン②：H】「男女の自己効力感に差がある（＝男子が高い）／高校3年間で男女の差を保ったまま等しいスピードで自己効力感が伸びる」パターン。

今回の結果では、「情報収集（102）」が、「パターン②：H」に該当する。



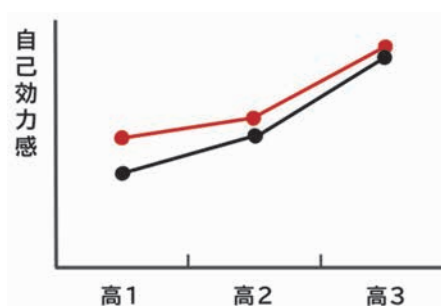
【パターン③：H】「高1・高2で男女の自己効力感に差がある（＝男子が高い）／高校3年間で女子が男子に追いつくかたちで自己効力感が伸びる」パターン。

今回の結果では、「傾聴力（501）」「説明力（504）」が「パターン③：H」に該当する。



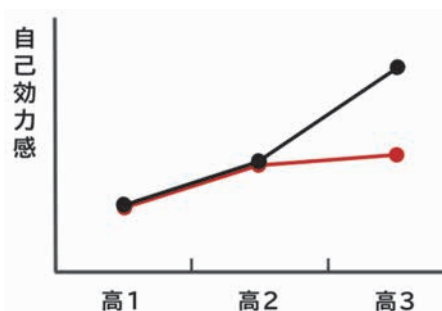
【パターン④：H】「高1・高2で男女の自己効力感に差がある（＝女子が高い）／高校3年間で男子が女子に追いつくかたちで自己効力感が伸びる」パターン。

今回の結果では、「共創力（601）」が「パターン④：H」に該当する。



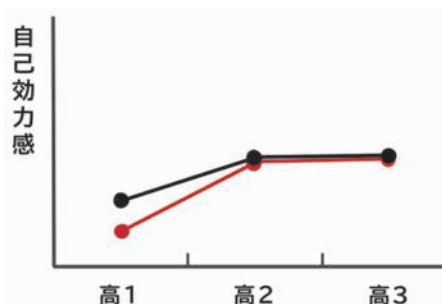
【パターン⑤：H】「高1と高2は男女の自己効力感の差がない／高3で男子の自己効力感が、女子を引き離すかたちで伸びる」パターン。

今回の結果では、「探究する意欲（301）」「推論する力（302）」が「パターン⑤：H」に該当する。



【パターン⑥：H】「高1のみで男女の自己効力感に差がある（＝男子が高い）／高2で女子が追い付き、高2と高3では男女の自己効力感の差がなくなる」パターン。

今回の結果では、「目標設定（401）」が「パターン⑥：H」に該当する。

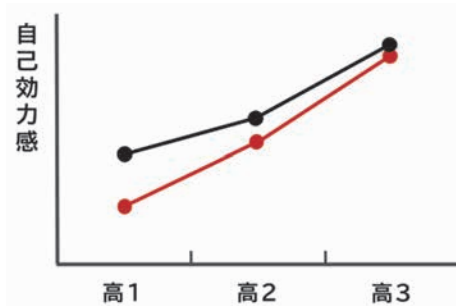


3-1-5. 男女別コンピテンシーの変容パターン（高校）

以上をふまえて、高校1年から3年までの、最大公約数的な自己効力感の伸長イメージを描くとすれば、どのようになるだろうか。

3-1-2節では、「男子のほうが女子よりも、自己効力感が高い項目数が多い」（観察結果3）という事実を確認している。その点を考慮すると、次のような変容パターンを描くことができる。

図1：自己効力感の伸長イメージ（高校）



この最大公約数的な自己効力感の伸長イメージを、データで傍証してみよう。次のクロス表は、Chufu-compass データについて、コンピテンシー 14 項目の回答をすべて合算したかたちで、「自己効力感・低」／「自己効力感・高」に振り分けたものを、高1～高3の各学年別・男女別に見たものである⁵。それぞれ異なる質問文に対する回答結果が相殺されるなどしているため、強い意味を読み込むことは不適切だが、学年が上がるにつれての自己効力感の変

容については、大まかに浮かび上がるだろう。

コンピテンシー 14項目の合算		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		合算	%	合算	%	総項目数	%
高 1	男子	1416	61.3%	894	38.7%	2310	100.0%
	女子	1829	63.4%	1055	36.6%	2884	100.0%
合計		3245	62.5%	1949	37.5%	5194	100.0%

コンピテンシー 14項目の合算		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		合算	%	合算	%	総項目数	%
高 2	男子	1578	59.3%	1082	40.7%	2660	100.0%
	女子	1659	60.8%	1071	39.2%	2730	100.0%
合計		3237	60.1%	2153	39.9%	5390	100.0%

コンピテンシー 14項目の合算		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		合算	%	合算	%	総項目数	%
高 3	男子	1106	48.2%	1190	51.8%	2296	100.0%
	女子	1295	50.5%	1267	49.5%	2562	100.0%
合計		2401	49.4%	2457	50.6%	4858	100.0%

この結果からは、高校では男女差はほぼ見られず、高1～高2へのコンピテンシーの伸びは微増であること、しかし、高3では明確に自己効力感が伸長する結果となっていること、などが分かる。これをそのまま図示すると、右図のようなイメージとなる。このイメージは、冒頭の最大公約数的イメージとは微妙に相違しているため、どちらの

モデルがより適切であるかは、今後のデータの蓄積によって検証していく必要があるだろう。

ただし 2024 年分析においては、「自己効力感の項目数では男子が優位であること」を尊重し、さしあたって、最初のイメージ図を採用しておくことにする。



⁵ 高1を例に説明する。高1の回答人数総数は371名であり、それぞれが14項目に回答すると、回答総項目数は5194項目である。このうち、165人の男子が14項目に回答（＝総項目数2310）し、206人の女子が14項目に回答（＝総項目数2884）する。そのうえで、自己効力感の「低／高」に区分したものが、上記のクロス集計表となる。

3-2. ジェンダー変数による分析：中学編

3-2-1. 「学年×全コンピテンシー項目」の概観（中学）

次に、中学（内進生）の分析に移ろう。

まずは高校と同様、コンピテンシー全項目について、男子の自己効力感が高いものを「青色」で着色し、女子の自己効力感が高いものを「赤色」で着色した表を掲げる（着色は、5ポイント以上のパーセンテージの差がついたものに限定する。なお「グレー」は、ジュニア版調査項目から削除された項目である）。

中1-中3：男子の自己効力感が高いものが「青色」、女子の高いものが「赤色」

中1

7つのカテゴリー	14のコンピテンシー項目	
I 学習する力	知識獲得(101)	情報収集(102)
II 考える力	課題発見(201)	論理的思考(202)
III 新しいことに挑む力	探究する意欲(301)	推論する力(302)
IV やり遂げる力	目標設定(401)	計画管理(402)
V(1) 理解する力	傾聴力(501)	内容理解(502)
V(2) 伝える力	記述力(503)	説明力(504)
VI 協力する力	共創力(601)	行動力(602)

中2

7つのカテゴリー	14のコンピテンシー項目	
I 学習する力	知識獲得(101)	情報収集(102)
II 考える力	課題発見(201)	論理的思考(202)
III 新しいことに挑む力	探究する意欲(301)	推論する力(302)
IV やり遂げる力	目標設定(401)	計画管理(402)
V(1) 理解する力	傾聴力(501)	内容理解(502)
V(2) 伝える力	記述力(503)	説明力(504)
VI 協力する力	共創力(601)	行動力(602)

中3

7つのカテゴリー	14のコンピテンシー項目	
I 学習する力	知識獲得(101)	情報収集(102)
II 考える力	課題発見(201)	論理的思考(202)
III 新しいことに挑む力	探究する意欲(301)	推論する力(302)
IV やり遂げる力	目標設定(401)	計画管理(402)
V(1) 理解する力	傾聴力(501)	内容理解(502)
V(2) 伝える力	記述力(503)	説明力(504)
VI 協力する力	共創力(601)	行動力(602)

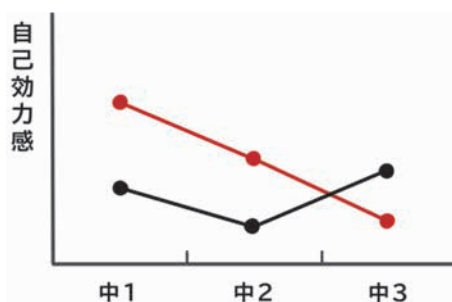
上記の図表を見ると、ジェンダー変数を加味した自己効力感の伸長について、明確な傾向が読みとれるだろう。それは、中1・中2では、女子の自己効力感が顕著に高い一方、中3ではそれが逆転し、男子の自己効力感が高くなることである。

3-2-2. 変容パターンを図示する（中学）

コンピテンシー項目ごとに学年間の変容を確認すると、特徴的な変化パターンとしては、次の「パターン①:J」～「パターン③:J」が挙げられる。

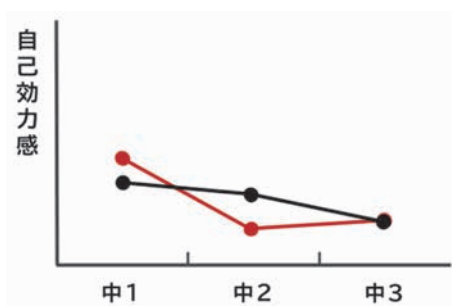
【パターン①: J】「中1・中2で、男女の自己効力感の差がある（＝女子が高い）／中3で男子が女子を追い抜く形で、自己効力感が伸びる」パターン。

今回の結果では、「推論する力 (302)」「説明力 (504)」が「パターン①:J」に該当した。



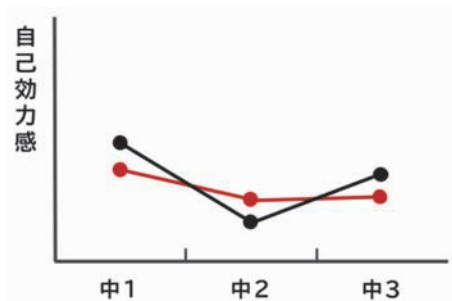
【パターン②: J】「中1で、男女の自己効力感に差がある（＝女子が高い）／中2で女子が落ち込み、男子が上回る／中3で男子がわずかに下がり、女子がわずかに上がることで差がなくなる」パターン。

今回の結果では、「課題発見 (201)」が「パターン②:J」に該当した。



【パターン③: J】「中1で、男女の自己効力感に差がある（＝男子が高い）／中2で男子が落ち込み、女子が上回る。中3で男子の自己効力感が回復する」パターン。

今回の結果では、「知識獲得 (101)」が「パターン③:J」に該当した。



3-2-3. 男女別コンピテンシーの変容パターン（中学）

では、中学1年から中学3年までの、最大公約数的な自己効力感の伸長イメージは、どのようになるだろうか。

全体的な傾向を見ると、中学の場合、全体的な傾向は「パターン①:J」と同じ傾向をたどるように思われる。すなわち、次の「推論する力（302）」「説明力（504）」のクロス集計表のような変化が、典型パターンとなるのである。

302 推論する力		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子	41	55.4%	33	44.6%	74	100.0%
	女子	49	50.0%	49	50.0%	98	100.0%
合計		90	52.3%	82	47.7%	172	100.0%

504 説明力		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子	52	70.3%	22	29.7%	74	100.0%
	女子	57	58.2%	41	41.8%	98	100.0%
合計		109	63.4%	63	36.6%	172	100.0%

302 推論する力		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中2	男子	61	76.3%	19	23.8%	80	100.0%
	女子	63	67.0%	31	33.0%	94	100.0%
合計		124	71.3%	50	28.7%	174	100.0%

504 説明力		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中2	男子	62	77.5%	18	22.5%	80	100.0%
	女子	64	68.1%	30	31.9%	94	100.0%
合計		126	72.4%	48	27.6%	174	100.0%

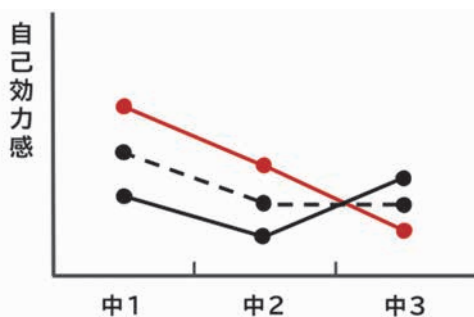
302 推論する力		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中3	男子	54	62.8%	32	37.2%	86	100.0%
	女子	70	81.4%	16	18.6%	86	100.0%
合計		124	72.1%	48	27.9%	172	100.0%

504 説明力		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中3	男子	48	55.8%	38	44.2%	86	100.0%
	女子	66	76.7%	20	23.3%	86	100.0%
合計		114	66.3%	58	33.7%	172	100.0%

「パターン①:J」を男女の合算でみると、2-4節で確認した、中学内進生の自己効力感の伸長傾向とも整合的である（「結果1：そもそも、内進生は入学時から自己効力感が高いとは言えない」・「結果2：中学生の自己効力感は、中1でもっとも高く、中2で下落し、低位のまま中3まで安定する傾向をたどる」）。

したがって、中学1年から中学3年までの、最大公約数的な自己効力感の伸長イメージは、近似的に、次のように描くことができるだろう。破線グラフは、男女平均を表す。

図2：自己効力感の伸長イメージ（中学）



高校と同様のやり方で、データによる傍証も試みておく。次のクロス集計表は、中1～中3まで、男女別に、**自己効力感の11項目の回答をすべて合算し、「自己効力感・低」／「自己効力感・高」**に振り分けたものである。この集計結果は、**上記の近似的イメージと完全に整合的なもの**となっている。

全コンピテンシー項目の合算		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		合算	%	合算	%	総項目数	%
中1	男子	482	59.2%	332	40.8%	814	100.0%
	女子	527	48.9%	551	51.1%	1078	100.0%
合計		1009	53.3%	883	46.7%	1892	100.0%

全コンピテンシー項目の合算		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		合算	%	合算	%	総項目数	%
中2	男子	629	71.5%	251	28.5%	880	100.0%
	女子	672	65.0%	362	35.0%	1034	100.0%
合計		1301	68.0%	613	32.0%	1914	100.0%

全コンピテンシー項目の合算		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		合算	%	合算	%	総項目数	%
中3	男子	592	62.6%	354	37.4%	946	100.0%
	女子	635	67.1%	311	32.9%	946	100.0%
合計		1227	64.9%	665	35.1%	1892	100.0%

3-3. まとめ：ジェンダー変数による分析がもたらすインパクト

本章で整理してきたデータをまとめよう。まずは、1-2節で引用した教員アンケートの回答内容をふたたび、振り返っておきたい。

もちろん全員ではないが、中学においては女子の方が物事に対してしっかりと取り組み、着実に消化していくことに長けている。また、生徒会活動やスピーチコンテストなど、自ら立候補しアウトプットするような活動において、中学では女子の活躍が目立つ。これらの点から、アンケートにおける「男女差」を知りたい。

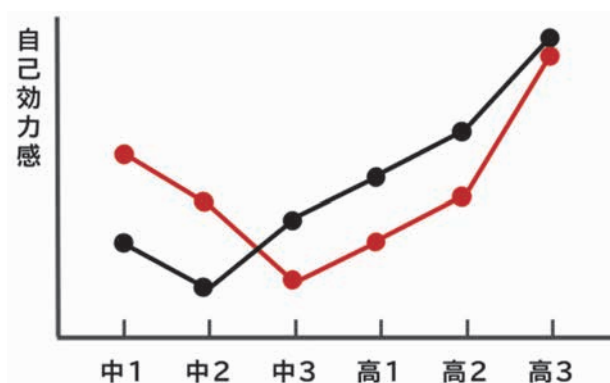
(2023年12月3日実施の教員アンケート、傍点引用者)

男女のジェンダー変数の「肌感覚」が述べられたこの言葉を、今回のデータ分析結果と突き合わせてみると、大変興味深いことが分かる。というのも、「女子の方が活発で、着実に学校生活に取り組んでいるように見える」ことが、「自己効力感の高さ」を意味するものだと考えるならば、それは半分は正しく、半分は間違っていることになるからだ。

すでに見たように、中学女子の自己効力感の中1～中3のあいだに着実に低下する。逆に、中学男子は中3で自己効力感を回復・好転させ、女子を逆転する。すなわち、**中学（内進生）の前半までは、女子が自己効力感で上回るが、後半以降は、男子が相対的に自信を深めてリードする傾向**になっているのである。

この知見を、中高6年間のスパンのなかで捉えてみよう。中学・高校の自己効力感傾向を合体したイメージ図は、次のようなものになる。

図3：自己効力感の伸長イメージ（中高6年間）



もちろん、3-1-5節でも触れたように、高校以降の男女別の自己効力感の伸長パターンは、データの精度としては、まだ不安定なものがある。さらに、高校からは「高入生」のデータが加わっており、それについての考慮も必要であるだろう。これらの点をふまえたうえでなお、2024年分析時点での「図3：自己効力感の伸長イメージ（中高6年間）」からは、**中高6年間のスパンのなかで、男女の自己効力感の伸び方には明確な違いがある**ことを、さしあたり確認できる。この変容傾向についても、さまざまな仮説が思い浮かぶところであり、今後、具体的な現場レベルの実践と突き合わせるかたちで、あるいは新たなデータによる再検証を通じて、さらなる質の高いリフレクションが必要となるだろう。

なお、本章で分析対象とした、中1～高3までのコンピテンシー全項目のクロス集計表（男女別）を、次頁以降で資料として掲げておく。共通するコンピテンシーが横一列に並列されているので、それぞれの項目ごとの伸長傾向を確認してみたい。

2024年度中学生コンピテンシー(中1男女別)

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子	48	64.9%	26	35.1%	74	100.0%
	女子	71	72.4%	27	27.6%	98	100.0%
合計		119	69.2%	53	30.8%	172	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子						
	女子						
合計							

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子	56	75.7%	18	24.3%	74	100.0%
	女子	66	67.3%	32	32.7%	98	100.0%
合計		122	70.9%	50	29.1%	172	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子						
	女子						
合計							

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子	56	75.7%	18	24.3%	74	100.0%
	女子	56	57.1%	42	42.9%	98	100.0%
合計		112	65.1%	60	34.9%	172	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子	41	55.4%	33	44.6%	74	100.0%
	女子	49	50.0%	49	50.0%	98	100.0%
合計		90	52.3%	82	47.7%	172	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子	46	62.2%	28	37.8%	74	100.0%
	女子	46	46.9%	52	53.1%	98	100.0%
合計		92	53.5%	80	46.5%	172	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子	60	81.1%	14	18.9%	74	100.0%
	女子	66	67.3%	32	32.7%	98	100.0%
合計		126	73.3%	46	26.7%	172	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子	30	40.5%	44	59.5%	74	100.0%
	女子	23	23.5%	75	76.5%	98	100.0%
合計		53	30.8%	119	69.2%	172	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子	44	59.5%	30	40.5%	74	100.0%
	女子	45	45.9%	53	54.1%	98	100.0%
合計		89	51.7%	83	48.3%	172	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子						
	女子						
合計							

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子	52	70.3%	22	29.7%	74	100.0%
	女子	57	58.2%	41	41.8%	98	100.0%
合計		109	63.4%	63	36.6%	172	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子	19	25.7%	55	74.3%	74	100.0%
	女子	17	17.3%	81	82.7%	98	100.0%
合計		36	20.9%	136	79.1%	172	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中1	男子	30	40.5%	44	59.5%	74	100.0%
	女子	31	31.6%	67	68.4%	98	100.0%
合計		61	35.5%	111	64.5%	172	100.0%

2024年度中学生コンピテンシー(中2男女別)

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中2	男子	71	88.8%	9	11.3%	80	100.0%
	女子	77	81.9%	17	18.1%	94	100.0%
合計		148	85.1%	26	14.9%	174	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中2	男子						
	女子						
合計							

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中2	男子	63	78.8%	17	21.3%	80	100.0%
	女子	81	86.2%	13	13.8%	94	100.0%
合計		144	82.8%	30	17.2%	174	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中2	男子						
	女子						
合計							

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中2	男子	64	80.0%	16	20.0%	80	100.0%
	女子	80	85.1%	14	14.9%	94	100.0%
合計		144	82.8%	30	17.2%	174	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中2	男子	61	76.3%	19	23.8%	80	100.0%
	女子	63	67.0%	31	33.0%	94	100.0%
合計		124	71.3%	50	28.7%	174	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中2	男子	55	68.8%	25	31.3%	80	100.0%
	女子	64	68.1%	30	31.9%	94	100.0%
合計		119	68.4%	55	31.6%	174	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中2	男子	75	93.8%	5	6.3%	80	100.0%
	女子	78	83.0%	16	17.0%	94	100.0%
合計		153	87.9%	21	12.1%	174	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中2	男子	42	52.5%	38	47.5%	80	100.0%
	女子	41	43.6%	53	56.4%	94	100.0%
合計		83	47.7%	91	52.3%	174	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中2	男子	49	61.3%	31	38.8%	80	100.0%
	女子	54	57.4%	40	42.6%	94	100.0%
合計		103	59.2%	71	40.8%	174	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中2	男子						
	女子						
合計							

504 説明力		自己効力感・低 (Lv.1+Lv.2)		自己効力感・高 (Lv.3+Lv.4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
中 2	男子	62	77.5%	18	22.5%	80	100.0%
	女子	64	68.1%	30	31.9%	94	100.0%
合計		126	72.4%	48	27.6%	174	100.0%

2024年度高校生コンピテンシー(高1男女別)

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高1	男子	110	66.7%	55	33.3%	165	100.0%
	女子	157	76.2%	49	23.8%	206	100.0%
合計		267	72.0%	104	28.0%	371	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高1	男子	114	69.1%	51	30.9%	165	100.0%
	女子	161	78.2%	45	21.8%	206	100.0%
合計		275	74.1%	96	25.9%	371	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高1	男子	118	71.5%	47	28.5%	165	100.0%
	女子	154	74.8%	52	25.2%	206	100.0%
合計		272	73.3%	99	26.7%	371	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高1	男子	102	61.8%	63	38.2%	165	100.0%
	女子	134	65.0%	72	35.0%	206	100.0%
合計		236	63.6%	135	36.4%	371	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高1	男子	119	72.1%	46	27.9%	165	100.0%
	女子	141	68.4%	65	31.6%	206	100.0%
合計		260	70.1%	111	29.9%	371	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高1	男子	107	64.8%	58	35.2%	165	100.0%
	女子	141	68.4%	65	31.6%	206	100.0%
合計		248	66.8%	123	33.2%	371	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高1	男子	105	63.6%	60	36.4%	165	100.0%
	女子	144	69.9%	62	30.1%	206	100.0%
合計		249	67.1%	122	32.9%	371	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高1	男子	129	78.2%	36	21.8%	165	100.0%
	女子	162	78.6%	44	21.4%	206	100.0%
合計		291	78.4%	80	21.6%	371	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高1	男子	74	44.8%	91	55.2%	165	100.0%
	女子	79	38.3%	127	61.7%	206	100.0%
合計		153	41.2%	218	58.8%	371	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高1	男子	83	50.3%	82	49.7%	165	100.0%
	女子	113	54.9%	93	45.1%	206	100.0%
合計		196	52.8%	175	47.2%	371	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高1	男子	103	62.4%	62	37.6%	165	100.0%
	女子	128	62.1%	78	37.9%	206	100.0%
合計		231	62.3%	140	37.7%	371	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高1	男子	104	63.0%	61	37.0%	165	100.0%
	女子	145	70.4%	61	29.6%	206	100.0%
合計		249	67.1%	122	32.9%	371	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高1	男子	66	40.0%	99	60.0%	165	100.0%
	女子	66	32.0%	140	68.0%	206	100.0%
合計		132	35.6%	239	64.4%	371	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高1	男子	82	49.7%	83	50.3%	165	100.0%
	女子	104	50.5%	102	49.5%	206	100.0%
合計		186	50.1%	185	49.9%	371	100.0%

2024年度高校生コンピテンシー(高2男女別)

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高2	男子	142	74.7%	48	25.3%	190	100.0%
	女子	154	79.0%	41	21.0%	195	100.0%
合計		296	76.9%	89	23.1%	385	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高2	男子	124	65.3%	66	34.7%	190	100.0%
	女子	142	72.8%	53	27.2%	195	100.0%
合計		266	69.1%	119	30.9%	385	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高2	男子	132	69.5%	58	30.5%	190	100.0%
	女子	134	68.7%	61	31.3%	195	100.0%
合計		266	69.1%	119	30.9%	385	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高2	男子	112	58.9%	78	41.1%	190	100.0%
	女子	116	59.5%	79	40.5%	195	100.0%
合計		228	59.2%	157	40.8%	385	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高2	男子	127	66.8%	63	33.2%	190	100.0%
	女子	136	69.7%	59	30.3%	195	100.0%
合計		263	68.3%	122	31.7%	385	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高2	男子	111	58.4%	79	41.6%	190	100.0%
	女子	119	61.0%	76	39.0%	195	100.0%
合計		230	59.7%	155	40.3%	385	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高2	男子	110	57.9%	80	42.1%	190	100.0%
	女子	113	57.9%	82	42.1%	195	100.0%
合計		223	57.9%	162	42.1%	385	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高2	男子	151	79.5%	39	20.5%	190	100.0%
	女子	138	70.8%	57	29.2%	195	100.0%
合計		289	75.1%	96	24.9%	385	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高2	男子	81	42.8%	109	57.4%	190	100.0%
	女子	74	37.9%	121	62.1%	195	100.0%
合計		155	40.3%	230	59.7%	385	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%
高2	男子	103	54.2%	87	45.8%	190	100.0%
	女子	111	56.9%	84	43.1%	195	100.0%
合計		214	55.6%	171	44.4%	385	100.0%

		自己効力感・低 (Lv1+Lv2)		自己効力感・高 (Lv3+Lv4)		合計	
		人数	%	人数	%	人数	%</

4. 文系・理系はどう決まるか？——科学技術系人材の育成

4-0. 進路決定時期——想像以上に早い進路決定

第4章では、2024年度分析の「作業方針（3）」にしたがって、高校3年生を対象に実施された「文理選択はどのように？」アンケートの分析を進めていく。まず、このアンケートでは、「文系・理系の進路決定時期」について尋ねている。その全体結果から示そう。

全体

文理選択の時期（全体）	人数	割合
中学生以前から	106	32.3%
高校1年のとき	89	27.1%
高校2年のとき	118	36.0%
高校3年のとき	15	4.6%
合計	328	100.0%

次に、文系／理系別に選択時期の違いが分かるように、クロス集計表を並べておく。

文系

文理選択の時期（文系）	人数	割合
中学生以前から	80	29.9%
高校1年のとき	81	30.2%
高校2年のとき	96	35.8%
高校3年のとき	11	4.1%
合計	268	100.0%

理系

文理選択の時期（理系）	人数	割合
中学生以前から	26	43.3%
高校1年のとき	8	13.3%
高校2年のとき	22	36.7%
高校3年のとき	4	6.7%
合計	60	100.0%

さて、本校のカリキュラムでは、高1で「数学Ⅰ」・「数学A」・「化学基礎」の理数系科目を学び、高2で「数学Ⅱ」・「数学B」・「物理基礎」・「生物基礎」の理数系科目を学ぶ（2024年時点）。また、大学附属校である本校では、高1、高2、高3のそれぞれの機会に、オープンキャンパスなどの機会が用意されている。これらをふまえて、本校では、制度的なスケジュールとして、高校2年生のときに文理選択が行われる。

それをふまえてデータを見ると、次のことが分かる。**本校生徒の「進路決定時期」は想像した以上に早い。高1までに全体で6割近くの生徒が、文系・理系の方向性を見定めている。中学以前から進路を決めている生徒は3割程度であり、理系の場合は（データの母数が少ないとはいえ）43%が、中学時点ですでに理系進学を見定めている。**

なお、「文理選択はどのように？」アンケートでは、「進路決定時期」のほかにも、文系・理系の進路決定要因について、1）授業・成績からの影響、2）大学での学問・キャリアの影響、3）周囲からの影響、の3つの領域に区分して、各生徒の回答を集計している。次節以降では、この順に、結果を見ていくことにしよう。

4-1. 進路決定要因（1）：授業・成績からの影響

「授業・成績」については、次のような質問項目を用意した。

Q3. 【授業・成績】あなたが文系／理系の進路を定めるうえで、影響があったものをすべて選んでください。（複数選択可）

- ☐ 文系科目で、面白い授業があったから
- ☐ 理系科目で、面白い授業があったから
- ☐ 探究系の科目（教養総合など）で、面白い授業があったから
- ☐ 文系科目の成績が良かったから
- ☐ 理系科目の成績が良かったから
- ☐ 文系科目の成績が良くなかったから
- ☐ 理系科目の成績が良くなかったから
- ☐ 授業や成績は、文理選択には影響しなかった

文系・理系をあわせた全体の回答は、次のようになった。まず気になるのは、「探究系の科目（教養総合など）で、面白い授業があったから」の回答率が13.1%となっている点である。「探究系科目の面白さ」が進路決定に及ぼした影響が13%というのが、高い数値であるのか、低い数値であるのかは、見解が分かれるかもしれない。

データ全体

選択理由	人数	割合（文系）	割合（理系）	割合（全体）
文系科目で、面白い授業があったから	110	41.0%		
理系科目で、面白い授業があったから	35		58.3%	
文系科目の成績が良かったから	79	29.5%		
理系科目の成績が良かったから	34		56.7%	
文系科目の成績が良くなかったから	16		26.7%	
理系科目の成績が良くなかったから	134	50.0%		
探究系の科目（教養総合など）で、面白い授業があったから	43			13.1%
授業や成績は、文理選択には影響しなかった	56			17.1%
合計	328	268	60	100.0%

文系／理系で回答傾向にどのような違いがあるかにも注目してみよう。

データ全体（文系）

選択理由（文系）	人数	割合
文系科目で、面白い授業があったから	110	41.0%
文系科目の成績が良かったから	79	29.5%
理系科目の成績が良くなかったから	134	50.0%
合計	268	100.0%

データ全体（理系）

選択理由（理系）	人数	割合
理系科目で、面白い授業があったから	35	58.3%
理系科目の成績が良かったから	34	56.7%
文系科目の成績が良くなかったから	16	26.7%
合計	60	100.0%

ここからは分かるのは、次のことである。**文系**は、「文系科目の成績が良い」から文系を選ぶというよりは、「理系科目の成績が悪い」ことから文系を選択するという、「**理数系科目回避型**」の進路決定を行う傾向がある。他方、**理系**は、「理系に面白い授業」があり、かつ「理系科目の成績が良い」ことから理系を選択するという、「**理数系科目親和型**」の進路決定を行っており、文系科目が苦手であるという要因はあまり大きなものとはならない。

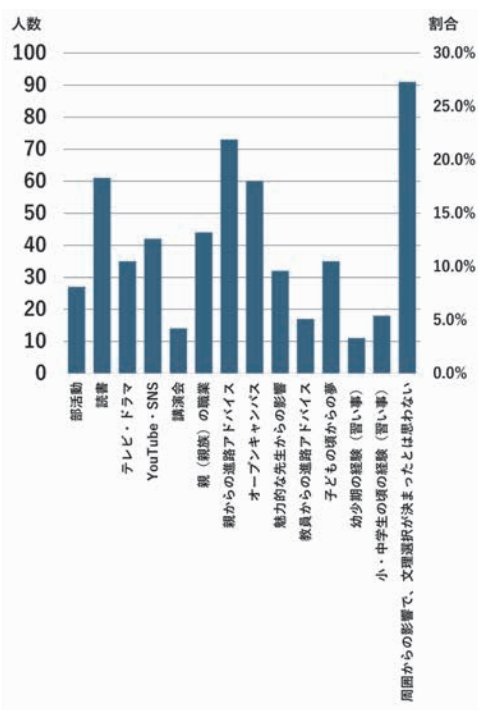
4-2. 進路決定要因（2）：周囲からの影響

「周囲からの影響」については、次のような質問項目を用意した。

Q 5. 【周囲からの影響】あなたが文系／理系の進路を定めるうえで、影響があったものをすべて選んでください。（複数選択可）

- | | | |
|---|--|------------------------------------|
| ☐ 部活動 | ☐ 読書 | |
| ☐ テレビ・ドラマ | ☐ YouTube・SNS | ☐ 講演会 |
| ☐ 親（親族）の職業 | ☐ 親からの進路アドバイス | ☐ オープンキャンパス |
| ☐ 魅力的な先生からの影響 | ☐ 教員からの進路アドバイス | |
| ☐ 子どもの頃からの夢 | | |
| ☐ 幼少期の経験（習い事） | ☐ 小・中学生の頃の経験（習い事） | |
| ☐ 周囲からの影響で、文理選択が決まったとは思わない | | |

文系・理系をあわせた全体の回答は、次のとおりとなった。

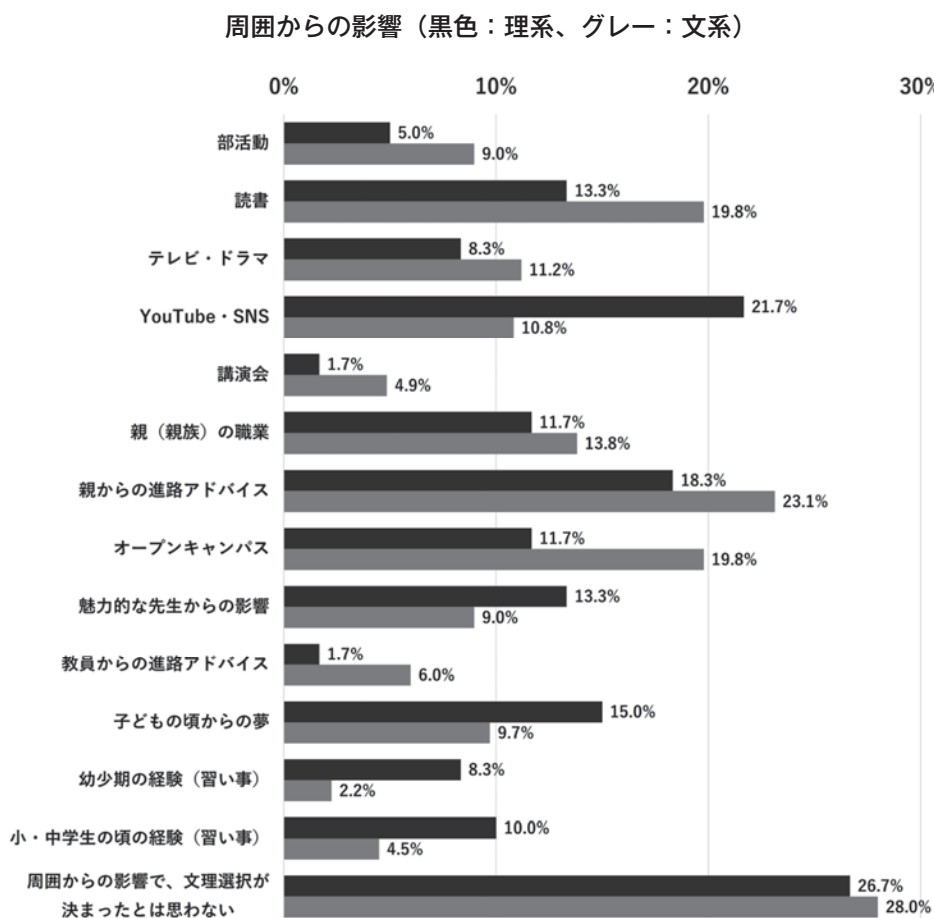


全体

回答項目	人数	割合
部活動	27	8.2%
読書	61	18.6%
テレビ・ドラマ	35	10.7%
YouTube・SNS	42	12.8%
講演会	14	4.3%
親（親族）の職業	44	13.4%
親からの進路アドバイス	73	22.3%
オープンキャンパス	60	18.3%
魅力的な先生からの影響	32	9.8%
教員からの進路アドバイス	17	5.2%
子どもの頃からの夢	35	10.7%
幼少期の経験（習い事）	11	3.4%
小・中学生の頃の経験（習い事）	18	5.5%
周囲からの影響で、文理選択が決まったとは思わない	91	27.7%
人数（全）	328	100.0%

ここからは、生徒は、「学校からの働きかけ」以外からも多くの影響を受けて、自らの進路を決定していることが分かる。上記のうち、「学校からの働きかけ」に該当する項目は、「部活動」・「講演会」・「オープンキャンパス」・「魅力的な先生からの影響」・「教員からの進路アドバイス」である。このなかでは「オープンキャンパス」が18.3%と最高値となっているが、それは「親からの進路アドバイス（22.3%）」・「読書（18.6%）」には及ばない水準である。

では、文理別の傾向には、どのような違いがあるだろうか。次の横棒グラフは、文理別の差異を視覚化したものである。



大きな違いが見られるものをピックアップしてみよう。理系は文系よりも、「オープンキャンパス」・「読書」・「親からの進路アドバイス」などから影響を受けることが少ない。他方、進路選択にあたって、理系の方が顕著に影響を受けている項目は、「YouTube・SNS」・「子どもの頃からの夢」・「幼少期・小中学生の頃の習い事」である。

上位項目から順にリスト化して、文系・理系別のクロス集計表も示しておこう。

文系上位

回答項目	人数	割合
親からの進路アドバイス	62	23.1%
読書	53	19.8%
オープンキャンパス	53	19.8%
周囲からの影響で、文理選択が決まったとは思わない	75	28.0%
人数（文）	268	100.0%

理系上位

回答項目	人数	割合
YouTube・SNS	13	21.7%
親からの進路アドバイス	11	18.3%
子どもの頃からの夢	9	15.0%
周囲からの影響で、文理選択が決まったとは思わない	16	26.7%
人数（理）	60	100.0%

4-3. 進路決定要因（3）：学問・キャリアからの影響

「学問・キャリア」要因をめぐるっては、次のような質問項目を用意した。

Q 4. 【学問・キャリア】あなたが文系／理系の進路を定めるうえで、影響があったものをすべて選んでください。（複数選択可）

- ☐ 大学で学びたい学問分野が、文系分野だったから
- ☐ 大学で学びたい学問分野が、理系分野だったから
- ☐ 将来、就きたい仕事は、文系分野に近かったから
- ☐ 将来、就きたい仕事は、理系分野に近かったから
- ☐ 文系分野に進んだ方が、就職や人生においてトクだと考えたから
- ☐ 理系分野に進んだ方が、就職や人生においてトクだと考えたから
- ☐ 大学での学問や仕事のことは、文理選択には影響しなかった

文系・理系では、以下の回答傾向となった。「学びたい学問分野が文系／理系だったから」は文・理ともに 60%程度で違いがみられない。

文系

選択理由（文系）	人数	割合
大学で学びたい学問分野が、文系分野だったから	164	61.2%
将来、就きたい仕事は、文系分野に近かったから	86	32.1%
文系分野に進んだ方が、就職や人生においてトクだと考えたから	28	10.4%
合計	268	100.0%

理系

選択理由（理系）	人数	割合
大学で学びたい学問分野が、理系分野だったから	37	61.7%
将来、就きたい仕事は、理系分野に近かったから	31	51.7%
理系分野に進んだ方が、就職や人生においてトクだと考えたから	15	25.0%
合計	60	100.0%

他方、「将来、就きたい仕事」は理系の方が明らかに高く、理系進学者は卒業後の進路をより明確に見定めていることが分かる。また、「就職や人生においてトクだから」と回答した者は、文系は10%程度にとどまっていたのに対し、理系は4分の1がそのように回答する。総じて、**理系は、功利主義的な観点も含んだ「キャリア逆算型」の進路決定**をする傾向にあることがうかがえる。

4-4. まとめ：文系・理系はどう決まるか？

以上のように、文系・理系の進路決定要因に関して、1) 授業・成績からの影響、2) 大学での学問・キャリアの影響、3) 周囲からの影響、の面からデータを概観してきた。本章で確認されたデータを統合して、総合的なイメージを描いてみよう。

まず、注目すべきであるのは、**本校生徒の「進路決定時期」は思った以上に早い**ことである。高1までに全体で6割近くの生徒が文系・理系の方向性を見定め、中学以前から方向性を定めている生徒も3割を超えている。とりわけ理系の場合は43%が、中学時点ですでに理系進学を見定めている。

このことから、次のような（ある意味では、学校にとっては「不都合」な）仮説が浮上する。もしかすると、**高校での理数系科目の学習や、オープンキャンパスの経験、教員の進路アドバイスなどは、文系・理系の進路決定要因としては、さほど大きな意味を占めていないのかもしれない**。進路選択のカギは、高校以前の経験、さらには学校以外の経験にあるかもしれないのである。

じっさい、生徒は「**学校からの働きかけ**」以外からも多くの影響を受け、自らの進路を決定している。とくに理系は、「YouTube・SNS」・「**親からの進路アドバイス**」からの影響が大きい。「**子どもの頃からの夢**」・「**幼少期・小中学生の頃の習い事**」の影響力も、文系には見られない特徴である。他方、文系は、「親からの進路アドバイス」・「読書」などで進路を決定する傾向がある（なお、文系は「オープンキャンパス」からの影響がまずまず大きい）。

とはいえもちろん、文系科目・理系科目の授業や成績が、進路決定に大きな影響を及ぼしていることは軽視されてはならない。データから見るかぎり、文系は、苦手科目を避ける「**理数系科目回避型**」の進路決定である一方、理系は、得意科目&好きな科目を重視する、「**理数系科目親和型**」の進路決定を行う傾向となっている。学校の授業や成績はやはり、それなりの重要性を持っている。

この点に関して、少しだけデータの補足をしておく。ここで試みに、「中学以前から文系／理系の進路決定していた」という「**早期進路決定グループ**」（文系80名、理系26名）を抽出し、その選択理由の傾向を見てみよう。

「早期進路決定グループ（中学以前から）」の選択理由【授業・成績からの影響】

中学以前から（文系）

選択理由（中学以前・文系）	人数	割合
文系科目で、面白い授業があったから	39	48.8%
文系科目の成績が良かったから	38	47.5%
理系科目の成績が良くなかったから	44	55.0%
合計	80	100.0%

中学以前から（理系）

選択理由（中学以前・理系）	人数	割合
理系科目で、面白い授業があったから	15	57.7%
理系科目の成績が良かったから	16	61.5%
文系科目の成績が良くなかったから	5	19.2%
合計	26	100.0%

このデータを4－1節の全体傾向と比較してみると、文系ではやや「理数系科目回避型」の傾向が強まり（ただし、「文系科目親和型」も強くなるのが特徴）、理系では「理数系科目親和型」の傾向がやや強まっていることが分かる。すなわち、もしかすると生徒は、**中学などの早い段階から、文系科目・理系科目についての得意／苦手科目を進路決定に結びつけている**のかもしれないのである。

さて、理系は、「YouTube・SNS」・「親からの進路アドバイス」などの影響を受けながら、**キャリア逆算型の進路決定**をする点でも特徴がある。ここから、生徒たちは、理数系科目に対するみずからの適性・親和性を見定めつつ、その他のさまざまな要因も勘案しながら、それなりに早い時期にキャリアや進路のイメージを固めていく姿が浮上するだろう。

5. 結論

結論として、2024 年度分析の知見をまとめておく。

- (1) 中学生（内進生）の自己効力感は、入学時点から高いとはいえず、中2で下落し、低位のまま中3で安定する傾向をたどる。
- (2) 背景として、「小学校以前のとりわけ中学受験の経験」が、自己効力感の低さに影響していることが推測される。
- (3) 中学生（内進生）についてジェンダー別に見ると、「中1・中2では、女子の自己効力感が顕著に高い一方、中3ではそれが逆転し、男子の自己効力感が高くなる」という明確な傾向が見られる。
- (4) 高校生では、男子の方が「自己効力感の高い」コンピテンシー項目が多く、女子と比べてやや優勢である。ただし、高校3年間で自己効力感が総体的に向上していくなかで、中学からの顕著な男女差は消失する方向で進んでいく。
- (5) 文系・理系の進路は、高校入学以前の早い時期から、学校外の要因もさまざまにも影響されるかたちで、見定められる。文系と比べて、理系では「キャリア逆算型」の意識が強くなる。
- (6) 文系は苦手科目を避ける「理数系科目回避型」、理系は得意で好きな科目を志向する「理数系科目親和型」の進路決定を行う。これも、高校入学以前からの経験が、無視できない比重を占める。

本稿の「作業方針（1）～（3）」は、それぞれ別個の目的のもとに遂行されているものの、このように知見を整理してみると、ひとつのメッセージが明確に浮かび上がってくる。

それは、**中高6年間のトータルで、ジェンダー変数をふまえながら、生徒の成長とカリキュラムの配置を見ていくこと、その両者の有機的なつながりを意識していくことの重要性**である。さらに、学校外のさまざまな要因もふくめて、やはり中高6年間のトータルで、生徒の成長を検証する視点も重要となる。

上記の知見は、本校 SSH 事業における「多様な他者との対話性を備えた科学技術系人材を育成するための、中高大を貫く教育課程の開発」という目的との関連においても、多くのことを示唆する。

第一に、「中高大を貫く教育課程」を開発することの意義である。「科学技術系人材の育成」についてはさまざまな考え方がありうるが、それを「狭義の理系」として見た場合、理系は、

「キャリア逆算型」の進路決定をしており、また、「理数系科目親和型」の進路決定をしていることが明らかとなった。したがって、**1) 早い時期からキャリアをイメージしてもらう**という意味で、「**中高大**」の**連携**が重要となることは確実である。さらには、**2) 早い時期から理数系科目が好きになるような取り組みが必要である**という意味で、「**中高大**」の**連携**が欠かせない。加えて、「理数系科目回避型」の進路決定をしている文系（非理系選択者）に対する働きかけとしては、**3) 早い時期から理数系科目が嫌いにならないような取り組みが必要である**ことも示唆されるだろう。

第二に、「中高大を貫く教育課程」において、ジェンダーによる傾向の差異をふまえた、実践の振り返りが重要である。**1) 中学入学時点で「自己効力感が低い男子生徒」に対しては、より自信を高めていくための方法論を考えていく必要があるかもしれない。**あるいは、**2) 中学入学以降、「自己効力感が下がっていく女子生徒」に対しては、女子の自信が下がらないような接し方、あるいは、自己効力感が一時期下がっていくことを成長段階として前提とする接し方を考えていく必要があるかもしれない。**

2024 年度分析の結論は、以上のように整理できる。本校 SSH 事業の取り組みをトータルに検証し、有効なりフレクシオンを進めていくためには、こうした事業評価をめぐる話題の水準においても積極的に知見を共有し、「対話性」の質をより一層高めていくことが望まれる。

参考データ

本文の分析には組み込まなかったものの、興味深いと思われるデータを紹介する。

1) 「進路決定時期×進路先」のクロス集計表

経済学部系・商学部系の進路決定は、それほど早くない傾向がある。文系の進路決定時期が、理系に比べて遅れ気味であるのは、このことが原因かもしれない。

全体			理系のみ			文系のみ		
文理選択の時期(全体)	人数	割合	文理選択の時期(理系)	人数	割合	文理選択の時期(文系)	人数	割合
中学生以前から	106	32.3%	中学生以前から	26	43.3%	中学生以前から	80	29.9%
高校1年のとき	89	27.1%	高校1年のとき	8	13.3%	高校1年のとき	81	30.2%
高校2年のとき	118	36.0%	高校2年のとき	22	36.7%	高校2年のとき	96	35.8%
高校3年のとき	15	4.6%	高校3年のとき	4	6.7%	高校3年のとき	11	4.1%
合計	328	100.0%	合計	60	100.0%	合計	268	100.0%

法学部進学者のみ			経済学部・商学部進学者のみ			文学・芸術系進学者のみ		
文理選択の時期(法学部)	人数	割合	文理選択の時期(経済・商)	人数	割合	文理選択の時期(文学・芸術)	人数	割合
中学生以前から	44	35.2%	中学生以前から	20	20.2%	中学生以前から	16	38.1%
高校1年のとき	28	22.4%	高校1年のとき	37	37.4%	高校1年のとき	14	33.3%
高校2年のとき	47	37.6%	高校2年のとき	37	37.4%	高校2年のとき	12	28.6%
高校3年のとき	6	4.8%	高校3年のとき	5	5.1%	高校3年のとき	0	0.0%
合計	125	100.0%	合計	99	100.0%	合計	42	100.0%

2) 「親からの進路アドバイス」と回答した者(73人)の進路

「親からの進路アドバイス」が進路に影響したと回答した者のうち、法学部進学者の割合はあきらかに高い。これは、中央大学の学部のかなで、法学部の威信が高く見積もられていることの反映かもしれない。

親からの進路アドバイスにチェックを入れた73名

回答項目	人数	割合
法学・政治学	36	49.3%
経済学・経営学・商学	22	30.1%
哲学・思想・文学・社会学・教育学	4	5.5%
物理学・工学	3	4.1%
生物学・農学	0	0.0%
化学	2	2.7%
情報・数学	5	6.8%
薬学・医学	1	1.4%
芸術系	0	0.0%
その他	0	0.0%
合計	73	100.0%

参考文献

山村和世・禰覇陽子、2024、「Chufu-compass データは「使える」のか？ ——コンピテンシー自己評価アンケート分析（SSH II期）Vol.1——」、中央大学附属中学校・高等学校紀要『教育・研究 2023』第 37 号。

-
- i 山村 和世（やまむら わせい wasei.r@hs.chuo-u.ac.jp）。中央大学附属中学校・高等学校教諭（中学社会・地歴公民科）。
- ii 禰覇 陽子（ねは ようこ y-neha@hs.chuo-u.ac.jp）。中央大学附属中学校・高等学校兼任講師、SSH 非常勤講師。